

ポジティブな接近動機及び期待が知覚時間に与える影響

森 雅

人間は様々な感覚モダリティで捉えた事象の変化や継起の側面を手がかりに知覚時間を構成する(松田, 1996)。その手がかりの一つである「感情」について、昨今、動機の強さ(接近/回避)を強調するモデルが検討されており、時間研究の分野でもこの新たなモデルに則った研究が求められる。本研究では、動機と知覚時間との関連を検討した、Gable & Poole(2012)の研究を基に、その問題点を改善しての追試を行った。

本研究では、「感情価」と「覚醒」の2要因で感情を捉えた。接近動機に関しては、「接近したいという感情」がポジティブな感情価に属し、「接近したいという感情の強さ」が覚醒の強さによって規定されると考えた。また、覚醒を高めることで接近動機を強める働きが示唆される「期待」にも、知覚時間との関連があるものと考えた。回避動機に関する時間研究と比較して、接近動機に関する時間研究が少ないことから、本研究では「接近動機」に着目し、以下の2つの実験を通して、接近動機と期待のそれぞれと知覚時間との関連を検討した。

実験1では、喚起する覚醒の強さが異なる、ポジティブな3種類の画像(非接近・低接近・高接近)によって、外発的な接近動機の強さを操作した。結果、「高接近状態では知覚時間が短くなる」という仮説1は支持されず、原因として、接近動機を喚起するために十分な覚醒が得られなかった可能性と、他の要因の関与が示唆された。この要因としては「興味」が考えられたが、検証の結果、興味と知覚時間には関連がないことが示された。また、「食欲」という内発的な接近動機にも着目し、「食欲に基づく接近動機が強い個人ほど知覚時間は短くなる」という仮説2をたてたが、この仮説も支持されず、原因として動機づけの不足が考えられた。

実験2では、「期待」に着目した。デザート画像をみせ、「表示されたデザートを食べることができる」という教示の有無によって参加者の期待を操作した。実験中の経過時間について、「デザート消費を期待した者は、時間を短く評価する」という仮説3をたてた。結果、仮説は支持されず、原因として実験手順の不備が指摘された。

しかし、以上の実験より、「覚醒」と知覚時間の関連が浮かび上がった。すなわち、先行研究でみられた知覚時間と接近動機との関連は、「覚醒」を通じた擬似的な関係であり、「覚醒」を高める要因であれば、Gable & Poole(2012)の主張する「接近動機」でなくとも、知覚時間を短く評価させる効果があると考えられた。

本実験では先行研究の手続きや刺激の問題点の改善を図ったが、そのことが仮説の不支持につながった可能性があり、研究手法を検討し直す必要性が指摘された。また、松田(2007)が示唆したように、神経心理学的領域における時間研究の実施を通して、「覚醒」と知覚時間の関連をより詳細に検討する必要性が考えられた。これらを踏まえた研究の実施が、今後の展望である。(応用行動学・ボランティア行動学研究分野)